

令和6年度学校自己評価表（聖徳学園高等学校データサイエンスコース）

目指す学校像	聖徳太子の「和」の精神を建学の礎とし、互いを尊重し協働する心を大切にしながら、時代の変化に柔軟に対応する教育を推進する。
重点目標	1.急速に進展する情報化社会やグローバル化に対応するため、積極的に新しいテクノロジーを導入する。 2.生徒一人ひとりの個性と強みを伸ばす教育に取組む。 3.データサイエンスを駆使し、新しい価値を創造する。

達成度	A	ほぼ達成（8割以上）
	B	概ね達成（6割以上）
	C	変化の兆し（4割以上）
	D	不十分（4割未満）

学校評価						学校評価	
年度目標						年度評価	
番号	現状と課題	評価項目	具体的方策	方策の評価指標	評価項目の達成状況	達成度	本年度への課題と改善策
1	データサイエンス教育の基盤となるICT環境は整いつつあるが、AI・VR・大規模データベース等の利活用は限定的。 グローバル化の観点から国際的なデータ比較や海外機関との連携がまだ不足。	データ分析に資するICT・AIツールの導入度合い 国際比較データを用いた授業の実施数 教員のデータサイエンス関連研修受講率	Wolfram、Python、AIツール等を授業に導入 国際データセット（UNDP、OECD、UNICEFなど）を活用した探究授業の開発 データサイエンス研修・ワークショップを教員対象に実施	ICT・AIを活用した授業：年間 10回以上 国際比較データを用いた授業：年間 3回以上 データサイエンス関連教員研修：年間 2回実施	文部科学省「高等学校 DX加速化推進事業（DX・ハイスクール）」の対象校に選定され、ICTを活用した文理横断的な学びを一層強化するとともに、先進的・革新的な教育実践を推進している。その一環として、ICT支援員の配置を充実させ、学習環境の整備を進めた。また、OECDやユニセフなどの国際比較データを活用した授業を展開し、生徒の探究活動へとつなげている。さらに、データサイエンス分野に関する教員の資質・能力向上を目的に、スタンフォード大学主導の「Women in Data Science（WIDS）」を本校で開催するなど、教員研修にも積極的に取り組んだ。	A	本年度への課題と改善策 生徒がデータを活用しながら社会課題を「自分ごと」として捉え、探究的に学びを進める姿勢が着実に育まれていることが確認できた。一方で、いくつかの課題も明らかとなった。第一に、探究活動における「問い」の質をさらに高める必要がある。生徒は関心に基づいてテーマを設定する一方で、課題の焦点化や因果関係を見通す力が十分に育っていない場面も見受けられた。第二に、データ分析の基礎的スキルと統計的思考を十分に定着させるためには、授業内での演習量やフィードバックの充実が求められる。第三に、探究成果の社会的発信にあり、英語での表現力や多様な立場への配慮など、より高度な表現力の育成が課題となった。
2	探究課題は一部の生徒に偏っており、全員が強みを活かす学習設計には至っていない。	探究課題の設定件数 デジタルポートフォリオ提出数 成果発表の開催回数	PPDACサイクルに基づく探究課題設定を必須化 学習成果をポートフォリオとして記録・提出 学年ごとの探究成果発表会を開催	生徒一人ひとりの探究課題設定：全生徒分（6件） デジタルポートフォリオ提出数：全生徒分（6件） 成果発表会：学年ごとに年 1回、計3回開催	文部科学省の教育課程特例校として「データサイエンスコース」の第 1期生を迎え、文理融合型の探究的な学びを新たに開始した。課外活動を体系的に評価する学校設定科目「ウェルビーイング」を設置し、生徒一人ひとりの探究活動を継続的に支援した。その成果は、1年間のポートフォリオとして整理され、学期ごとの「中間報告会」、国際的な発表の場である「Women in Data Science（WIDS）@Osuma」、そして「年度末の最終成果発表会」の三つの場で発信・共有された。	A	本年度の実践を通じて、生徒はデータを活用し社会課題を自分ごととして捉える力を伸ばし、発表会や WIDS@Osuma で成果を発信する意欲を醸成した。しかし本年度に向けては、いくつかの課題が残されている。第一に、課題設定の質の向上である。生徒は関心に基づいてテーマを選んだものの、因果関係を踏まえた問いの焦点化にはさらなる指導が必要である。第二に、データリテラシーと統計的思考の定着が不十分であり、質・量・情報料の連携を強化した体系的な演習やフィードバックの充実が求められる。第三に、国際的な発表機会を通じて英語での論理的表現力や多様な視点を踏まえた発信力を育むことが今後の課題である。これらの改善を通じ、聖徳学園のデータサイエンス教育は Society5.0を担う人材育成へと一層推進することが期待される。
3	探究活動の量は増えているが、データ分析の質や学外発信はまだ限定的。	データサイエンス探究授業の実施数 探究レポートの提出件数 学外発表・コンテスト参加件数	地域課題・SDGsを題材にしたデータ分析型探究授業の展開 PPDACサイクルを明示的に組み込んだレポート指導 学外での研究発表・コンテスト出場を推奨	データサイエンス探究授業：年間 15回以上 探究レポート提出：全生徒分（11件） 学外発表・コンテスト参加：年間 3件以上	「データサイエンス探究」を特例校申請科目として設置し、週 2回の授業を通じて情報・数学・統計学を横断的に結びつけた探究型学習を展開している。生徒たちは統計的課題解決サイクル（PPDAC）に基づき、データを収集・分析・解釈し、社会的課題を自らの問題として捉え直しながら新たな価値の創造に挑戦した。各学期には教科横断の学びをレポートにまとめ、学際的視点から成果を可視化する取組を重ねてきた。さらに、その学びを深化させる場として「全国高等学校 eIV選手権大会（eIV）」や「WIDS@Osuma」などのコンテストに出場し、「優秀賞」をはじめとする評価を獲得している。これらの実践は、聖徳学園が目指す「データを道具として用い、社会課題を自分ごとと考え、解決策を探究する学び」を体現するものであり、生徒が主体的に社会と関わりながら学びを発展させる姿を示している。	A	本年度の実践では、生徒がデータサイエンスを手段として社会課題を自らの問題として捉え、学際的に探究を進める姿が見られた。一方で、今後の課題としては、第一に探究テーマの設定における深まりが十分でない場合があり、問いの質を高める支援が必要である。第二に、学期ごとのレポート作成は定着したが、データ分析の方法が既習の統計手法に偏りがちであり、多様なデータソースやプログラミング活用をさらに促す必要がある。第三に、外部発表への参加は成果を生んだものの、一部の生徒に活動が集中しがちで、全員の学びをどう広げることが課題である。改善策として、探究初期から問いの立て方を体系的に指導し、地道な連携を活かした多様なデータ収集の機会を設ける。また、学期内での小規模な発表やピアレビューを充実させ、全員が段階的に探究の深まりと自己成長を実感できる学習デザインを構築していく。

学校評価
年度評価
学校関係者からの意見・要望・評価 評価：DX・ハイスクール事業を追い風に、ICT・AIの活用や国際比較データを取り入れた授業は先進的であり、他校のモデルケースとなる。 要望：生徒の英語表現力を一層伸ばすため、海外機関の共同プロジェクトや留学生との協働学習の機会を拡大してほしい。 懸念：AI・VR活用は試行的にとどまっており、教育課程全体にどう定着させるかが課題。
評価：全員が探究課題を設定し、ポートフォリオを継続的に活用している点は、生徒一人ひとりの学びの可視化につながっている。 要望：ポートフォリオの内容を入学・就職活動にも活用できる形に整理してほしい。 懸念：課題設定の深まりに差があり、全員の探究の質を引き上げるための指導体制が必要。
評価：全国大会や WIDSでの発表は学校の特色を示す大きな成果であり、地域・社会に開かれた教育として評価できる。 要望：探究活動を特定の生徒に偏らせず、全員が外部発表や学会に挑戦できる環境整備を進めてほしい。 懸念：分析手法が基礎的な統計にとどまる傾向があり、Pythonや Wolfram Language を活用した応用的な分析を系統的に指導してほしい。